

会議記録

会議名	第2回 杉並区教育振興基本計画審議会
日時	令和2年12月24日(木) 午後4時00分～午後6時00分
場所	杉並区役所 中棟6階 第4会議室
出席者	<p>委員 牧野、小国、大津、加藤、小早川、渋谷、西山、増田、松野、大竹、河邊、松浦</p> <p>区側 教育長、教育委員会事務局次長、教育政策担当部長（教育人事企画課長事務取扱）、学校整備担当部長、中央図書館長（教育委員会事務局生涯学習担当部長兼務、中央図書館次長兼務）、庶務課長、学務課長、特別支援教育課長（就学前教育支援センター所長兼務）、副参事（子どもの居場所づくり担当）（子ども家庭部子どもの居場所づくり担当課長兼務）、学校整備担当課長、生涯学習推進課長、済美教育センター所長、済美教育センター指導主事（古林、宮脇）、済美教育センター教育相談担当課長</p>
配布資料	<p>10-3 令和2年度杉並区教育に関する事務の管理及び執行の状況の点検及び評価（令和元年度分）報告書《冊子》</p> <p>12-2 令和2年度 杉並区の教育《冊子》</p> <p>16 第2回杉並区教育振興基本計画審議会席次表</p> <p>17 第2回杉並区教育振興基本計画審議会区側出席者名簿</p> <p>18 第1回杉並区教育振興基本計画審議会における委員意見の概要</p> <p>19-1 新教育ビジョン策定に向けた審議会委員等による意見一覧 （1）「10年度の杉並の子どもたちのために私たちに何ができるか」</p> <p>19-2 〃 （2）新教育ビジョンに盛り込むべき視点（キーワード）</p> <p>19-3 〃 （3）教育に関する取組の基本的な方向性など</p> <p>20 すぎなみ教育シンポジウム 2020 における「これからの杉並の教育で大切にしたいキーワード」</p> <p>21 「令和の日本型学校教育」の構築を目指して（中間まとめ） 【概要】（令和2年10月7日中央教育審議会初等中等教育分科会）</p> <p>22 「杉並区教育ビジョン」に対する区民等のアンケートの実施結果について（令和2年12月18日時点）</p> <p>23 『これからの教育・学びを考えるために - 議論の叩き台として - 』</p> <p>参考資料 杉並区基本構想審議会第3部会のまとめシート（案）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 第3部会 資料39：様式2-1まとめシート<子ども>（案） ・ 〃 資料40：様式2-1まとめシート<文化>（案）

	<ul style="list-style-type: none">・ 〃 資料41：様式2-1まとめシート<スポーツ>（案）・ 〃 資料42：様式2-1まとめシート<学び>（案）
会議次第	<ol style="list-style-type: none">1 開会2 資料説明3 意見交換<ul style="list-style-type: none">(1) 10年後の杉並の子どもたちのために私たちにできること(2) 新たな教育ビジョンに盛り込むべき視点（キーワード）(3) 教育に関する取組の基本的な方向性4 事務連絡5 閉会

○会長 皆さん、こんにちは。よろしくお願いいたします。

前回も言いましたけれども、クリスマスイブのこの日に、私を含めて皆さん、お暇なのかどうか知りませんが、今日はご苦労さまです。ありがとうございます。

それでは、定刻になりましたので、第2回杉並区教育振興基本計画審議会を開催させていただきたいと思っております。

改めましてですが、この年末のお忙しいときにどうもありがとうございます。

先ほど片山委員からご欠席の連絡がありましたので、本日は欠席が1名と出席は12名で、出席人数が過半数を超えておりますので、本会は有効に成立していることをご報告いたします。

それから、今日、傍聴に来られている方から撮影と録音の申出がありましたが、許可したいと思います。委員の皆さん、いかがでしょうか。よろしいでしょうか。

(「異議なし」の声あり)

○会長 それでは、撮影と録音は許可したいと思います。よろしくお願いいたします。

では、まず初めに本日の会議資料の確認、説明を事務局からお願いいたします。

○庶務課長 庶務課長、都筑でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

まず、次第の裏面に、本日の会議資料の一覧を掲載してございます。このうち、資料21までは事前にお送りしておりますが、もし本日お持ちでない方がいらっしゃいましたら事務局のほうでご用意させていただきますので、お申し出いただければと思います。よろしいでしょうか。

それでは、説明を続けてまいります。

まず、資料10-3は、今年度、杉並区の就学前教育に焦点を当て、実施しました教育の点検・評価の報告書になります。昨年度及び一昨年度の報告書は第1回の審議会で既にお配りをしておりますが、その後、今年度分の報告書が完成しましたので、本日、この席でお配りをさせていただきました。

次に、資料12-2「令和2年度 杉並区の教育」です。こちらも前回、昨年度の冊子をお配りしておりましたが、その後、今年度の冊子が完成しましたので、改めてお配りをさせていただきました。

次に、資料16は、本日の審議会委員の席次表、また、資料17は本日の区側の出席

者名簿となっております。それぞれご確認をいただければと思います。

次に、資料18ですが、前回の審議会で委員の皆様から出していただいたご意見を事務局のほうで概要としてまとめさせていただいたものです。これからの10年、さらにその先を見据えた委員の皆様への課題認識、また、今後の杉並区が目指すべき教育の方向性などに関し、それぞれのお立場から意見を出していただいたものをまとめたものでございます。本日の議論の参考にしていただければと存じます。

次に、資料19-1から3ですが、これは前回の審議会以降に委員の皆様からご提出いただいた意見を項目別にまとめさせていただいたものです。また、各資料の後半には、子供園長会、区立学校の校長、庁内組織である調整会議のメンバーから出しました意見も参考までにおつけしてございます。各項目は改めて本日の議題にさせていただきます。ご自身の出された意見、また、他の委員の方の意見など御覧いただきつつ、本日さらに意見を頂ければと思っております。

次に、資料20でございますが、これは先日、12月12日の土曜日に高円寺学園で行われました「すぎなみ教育シンポジウム」において参加者の皆様から頂いた、今後の杉並の教育で大事にしたいと思うキーワードについてまとめた資料となります。当日は、会場に定員100人のところ96人、オンラインで90人の方にご参加を頂戴しました。会長には第1部のパネルディスカッションのパネラーとしてご出席をいただいたほか、何人かの審議会委員の皆様にもご参加していただいております。改めて御礼を申し上げます。第2部のグループワークで、参加者の皆さんから出されたキーワードを資料20の1ページ目にお示ししております。また、2ページ目以降には当日会場のスクリーンやオンライン上で表示したイメージ図を参考までにおつけしてございます。

次に、資料21、A4の横の資料でございますが、10月4日に中央教育審議会初等中等教育分科会から出されました「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（中間まとめ）」の概要となっております。令和3年中には、中教審から改めてこれらについて答申が出される予定となっておりますが、本日は参考ということでお配りをさせていただいております。

資料22ですけれども、12月4日からホームページ等で実施しておりますアンケート回答をまとめたものでございます。アンケートは18日で一旦取りまとめ、以降、

3月19日まで随時受け付ける形をとっておりますが、12月18日までで個人537件、団体5件、合計542件のご意見を頂きました。このうち、小・中学生からは452件のご意見を頂いております。

別紙1-1としまして、小・中学生からの意見一覧、また、このうち質問3-3と4-2への回答についてグラフとしてまとめたものを別紙1-2に記載してございます。

また、別紙2として、大人の方から頂いた意見を一覧としてまとめています。なお、本資料につきましては、後ほど担当者から補足の説明をさせていただきます。

次に、資料23ですが、会長にご用意いただいた資料となります。会の冒頭で会長からこれらについてご説明をいただきたいと思っております。よろしくお願ひいたします。

それから、参考資料としてお配りしているA4横、両面2枚の資料ですが、こちらは大竹委員が部会長、また、会長が副部会長として加わっていただいている基本構想審議会第3部会が所掌する各テーマ別の議論のまとめの案になります。このうち教育分野に該当するものは、最後の「学び」のシートとなりますが、他のシートにも関連するような記載が含まれていることから、本日、第3部会のシートを全て参考資料としてお配りをさせていただきます。

これらのシートについては、12月21日に行われた第3部会の最終回での議論を踏まえて、修正、調整の上、確定させていく予定としており、本日お配りしましたのはあくまでも案の段階のものとなります。新たな教育ビジョンは新たな基本構想と整合を図りながら策定することとしていることから、参考までに本日お配りをさせていただきます。

事務局からの説明は以上となります。

○会長 どうもありがとうございました。これから議事に入りたいと思っております。

前回、第1回目に皆さんにフリートキングという形で、子どもや教育を取り巻く様々な課題ですとか、今後の展望等についてお話をいただいたわけですが、それが今回、この資料18にまとめられているかと思っております。今回は新たな教育振興基本計画、教育ビジョンの策定に向けて、もう少し具体的なキーワードを出していただければと思っております。

本日の次第には、先ほどご説明いただいた資料の中にありますが、皆さんから頂

いたご意見の区分ごとに（１）から（３）の項目が明記されています。こうした次第に書かれている区分とは少し異なる形になるかもしれませんが、最初に前回の皆さんの議論を踏まえて、今日皆さんが議論をしやすいようにと思ひまして、私から幾つか話題提供のような形で、資料23になりますが、パワポを使って少しお話をさせていたきたいと思ひています。

前回の議論の中では様々なご議論をいただきました。従来のような計画の作り方はやめようといひますか、子どもたちのあるべき姿を描いた上で、それに向けてどんなことをしたらいいのか、どういう計画を立てるかという形で、従来は教育振興計画が作られていたわけですが、これから社会が不透明になって、様々に変化していく中で、あるべき姿を描いた上でそれに向けて、教育事業を進めていくということではなくて、むしろ子どもたちのために私たちに何ができるのかといった観点からこのビジョンを作ったらどうかというご意見に、基本的にはなっていたかと思ひます。

それを踏まえて今日のはじめに私のほうから、先ほどもご紹介がありました、12月12日に行われましたシンポジウムでお話しさせていただいたことと重なりますけれども、話題提供のような形でお話をさせていただいた上で、皆さんからご議論をいただければと思ひておりますので、どうぞよろしくお願ひいたします。

それでは、資料23を御覧いただけますでしょうか。あと、前方にもパワーポイントで映しております。いつもこういう資料を作ると言ひたいことがいっぱい出てきて、枚数が多くなるものですから、途中、端折りながら話をしたいと思ひております。今日の議論のたたき台としてお話をさせていただければと思ひます。

最初にまず、この「センス・オブ・ワンダー」です。皆さんご存じのとおりですが、もう60年前、私が生まれた頃に、レイチェル・カーソンという生物学者が言ひた言葉です。子どもたちが不思議に思ひ力、そういう感性が大事なのだということと、そして、それをなぜ私たちは大人になると忘れてしまうのかと問ひかけたのです。

『沈黙の春』という、当時一世を風靡した著作がありました。長い冬が終わって、本来、にぎやかな春がやってきているはずなのに、虫は飛ばないし、鳥もさんざめかない静かな春がやってきた。なぜかと言ひば、人間が全部殺してしまひたからだ、という農薬の被害の恐ろしさを訴えたものなのですけれども、人間は自然か

ら生まれているのに、なぜ自然を破壊して平気なんだろうかということが問いかけられたのです。

そのときに彼女が言ったのが、子どもたちが自然の中において、はっと驚く力ですとか、発見をして喜ぶ力、こういう力が大事ではないかということです。この力について、彼女は「センス・オブ・ワンダー」という言葉を使ったのです。そのときに、子どもたちだけではその力を発揮することは無理だということも彼女は言っていて、共感する他者、共感的な他者が必要で、一緒になって驚いてくれるとか、一緒になって「すごいね」と言ってくれるような人が一緒にいることによって、子どもたちは自然への関心を高めていく。そして自然との共存が可能になるのだ、と人々にと問いかけたのです。

例えば今の社会の中で、前回の皆さんのお話の中でも、そうしたことがやっぱり大事ではないかというご指摘だったと思います。しかも、資料に出ていますけれども、先日の教育シンポジウムでも、例えば子どもたちにどんなことを学んでほしいですかという質問に、ワクワク感や対話ですとか、好奇心という言葉がかなり強く出てきているのです。言い方を変えれば、いまの教育、とくに学校教育は、そういうふうになっていないと、区民の方々が感じているということなのかもしれないと思います。

それからもう1つ、これからの社会で私たちが忘れてはいけないものとして、「一人も取り残さない」ということがあると思います。SDGsでも指摘されていますが、孤立をしない、させない、といったことが大事ではないかと思います。それも、先日のシンポジウムのときに、「どのようなまちにしたいですか」と聞きますと、つながりですとか、コミュニケーションというのがとても強く出てくるのです。これも、区民の方々は、現状では十分ではないとおっしゃっているのかもしれませんが。その意味では、私たちはどこかでつながりたいと思いながら、孤立をしまっているという不安に駆られているといったことはないだろうかと思います。

次に、これからこのビジョンを作るにあたっての社会背景について簡単にご説明したいと思います。これは中教審でも議論をするときに使うものなのですが、例えばこんなことが言われ始めています。人生100年時代がやってきているということなのです。ドイツのマックス・プランク研究所が死亡率とか寿命の研究をしているのですが、日本についての研究もありまして、今年13歳の子どもたちの予測平均寿命

は107歳なのだということです。ですから、もしこれが当たっていると、2007年生まれの子どもたちの半分以上が2114年以降まで生きることになります。私たちはもう22世紀の話をしなればいけないときに差しかかっているかもしれないということなのです。

さらに、平均寿命が一番世界で長いと言われていて、男女合わせて大体84歳ぐらいです。これを超えたら長生きかという、もうそうではないのです。死亡最頻値年齢、一番たくさん人が亡くなる年齢なのですが、男性87歳、女性が92歳なのです。寿命が長いというのは、健康寿命も長い時代がやってくるということです。そして、今後、日本人だけ、外国人はカウントしていませんが、こういう人口構造に推移することが予測されていて、65歳以上の方があと30年ほどで4割を超える社会がやってくるといわれています。その頃、子どもたちの割合は1割を切ることが予測されています。

これを見て悲観的になることがあるわけですが、これは実は50年ぐらい前から予測されていたことなので、ある意味で政治的な不作為の結果だとも言われたりもします。人口の推移はこうなっています。今は減り始めているのです。明治の初年が3,300万人ぐらいだったのですが、約140年間かけて3倍ちょっと、3.5倍ぐらいにしてきたのです。これは工業化社会の1つの在り方です。工業を起こして、医療ですとか、栄養ですとか、環境、衛生を改善することによって、大きな人口を養えるようにしてきたということなのです。

山の左側の斜面の真ん中に点がありますが、これが終戦です。このときに大体7,200万人ぐらいだったんです。ただ、政治体制は変わりましたが、経済の在り方は明治からずっとこの頂点に達するまで工業社会なのです。学校というのは、実は工業社会に適応するような1つのシステムでもあったのです。その一つの形として、子どもたちを本人には責任がないものから一旦切り離して、例えば家の経済状態ですとか、職業や思想信条ですとか、宗教ですとか、階級ですとか、そうしたものを切り離して、均質な空間の中に置いて、均質な教育を与えて、同じような人になっていって、唯一学校の成績だけで自分の進路を自分で決定できるようにする仕組みとして作られたという面があるのです。

人口は、2006年から2007年頃に頂点になって、今、右の斜面に入っています。これを下り坂という、何か否定的な話になってしまいますけれども、人口が減る社

会に入ったということなのです。今、1億2,600万人ぐらいですが、このままいきますと、あと30年ほどで人口が9,700万人ぐらいになる。今世紀末には5,000万人ぐらいになるという予測が出ています。これは日本人だけなのです。

では、これはよくない社会なのかというと、そうではないだろうと。例えば平均寿命は、こういう伸びを示しています。今から70年前は平均寿命が50歳ちょっとだったのです。長生きの方も早く亡くなる方もいらっしやって、平均を取ると50歳ちょっとでした。そのもっと前は40歳前後だったのです。それが今や84歳という数字が出てくるぐらい長生きですし、死亡最頻値年齢をとれば男女平均で90歳ぐらいということは、みんなが長生きできる社会を作ってきたということになりますから、いい社会のはずなのです。

次に乳児死亡率をとりますと、1.9です。これは世界で最低レベルなのです。新生児1,000人当たりで1歳になるまでに亡くなる赤ちゃんが1.9人。本当はゼロになるのが一番いいのですが、実はこれは0にはならない数字なのです。今、新型コロナウイルス感染症の問題があって、100年前のスペイン風邪がよく比較に出されますが、その頃は10人に2人の赤ちゃんが亡くなっていました。しかし、その後、社会を改善して100分の1にしてきたのです。その意味では、とてもいい社会を作った結果の少子化ということですし、いい社会を作った結果、長寿になって高齢の方が増えてきたので、高齢社会となり、今、その方々が亡くなっていくので急激な人口減が起こるということですから、少子高齢人口減少というのは、いい社会を作ってきた結果でもあるのです。そういう条件をうまく使えるような社会にしていく必要があるのではないかということです。その意味では、少子高齢化人口減少という社会で悲観的になるよりは、むしろ人生を100年生きられるような社会を作ってきたのだから、どうすればよいのかを考える必要があるのではないか。子どもたちにこのいい社会をきちんと託していけるような社会にしなければいけないのではないかということだと思えます。

さらにもう1つ、人工知能がどんどん発達して、これから職業構造がどんどん変わるだろうということが既にもう5～6年前から言われているということです。中教審で新しいカリキュラムを考えるときにもこのことが議論になりました。2030年に今ある仕事の約半分が人工知能に取って代わられてしまうだろうということです。さらに、その頃、大学卒業生の65%が今はない仕事に就くようになると言われ

たのです。つまり、私たちは、お父さんの背中を見て生きなさいと子どもに言えなくなってしまうのではないかということなのです。では、どうしたらいいかという、いわゆる生きる力をつけなければいけないということなのです。生きる力とは一体何なのかということになると、実は、これがよく分からないということになってしまっているという面があります。

さらにもう1つ、最近、企業の方々と話をしても、少し気になることがあるのです。例えば人工知能と生体認証技術が結びついて、個別のいろんなサービスが提供されるようになってきます。IoTとありますが、これはインターネット・オブ・シングスということ、家電品がインターネットに接続されていて、例えば冷蔵庫に何があるか全部把握されて、所有者の食生活がデータベース化されて、これが足りません、これを買ったらいいですよというリコメンドが来たりするような仕組みもあります。よくあるのは、電動歯ブラシがインターネットにつながっていて、どこをどれくらいどういう形で磨いているかが全部把握されて、それに対して、こんな磨き方をしているとあなたは何年何月頃に歯槽膿漏になりますよという情報が来るようになって、このサービスを使いなさいというリコメンド紹介が来るようになるということなのです。とても便利にはなるわけですがけれども、逆に言えばシステムに依存させられてしまうことはないのかということが、今問われてきているのです。

もっと言えば、私が私であることを強く意識しなくても、システムがおまえだというような時代がやってくるようになるのではないか。そのときに、例えば私たちが今まで社会の仕組みとか、私のような者が教育学なんかをやっていると、自我とか、自己意識とかが大事になるわけですがけれども、そんなものが要らなくなる時代がやってくるのではないかということでもあるのです。システムに依存していれば何も起こらなくて、平穏な生活が送れるかもしれませんが、ちょっと極端な言い方をすれば、そんな生活は楽しいですかという話になると思うのです。

もう少し言えば、法体系も変えなければいけなくなるわけです。例えば、自動運転が現在のところ社会実装できないのはなぜかという、事故を起こした場合に、誰の責任かを現行の法律では決められないからだと言われるのです。技術はほとんど社会実装できるまで完成しているのですが、法の社会実装上、今は事故を起こしたら運転者が事故を起こしたことになるわけですが、自動運転で事故を起こ

したときに誰の責任になるのかが分からないのです。いまは、自我を持った主体が運転していること、さらにその主体は意志を持つ存在だということで、法体系がつくられていますから、事故を起こした場合にも、その主体の精神状態が問われるのです。ですから、もしシステムに私たちが自我を明け渡してしまえば、これはシステムが事故を起こしたことになるので、製造者の責任になるかもしれないですし、また、所有者になるかもしれないのですが、そこがまだうまく処理できないので、自動運転は実装できないのだと、この間、自動車メーカーの人たちが言っていました。そういうことなのです。その意味では、人の在り方が問われてくるような時代がやってくるだろうということがあります。

それから、もう1つは貧困問題です。気がついたら日本は子どもの貧困大国だったと言われたりするようになっていました。今、こども食堂が全国に5,000か所以上あると言われますし、相対的な貧困率は、6人から7人に1人の子どもが貧困家庭にいる。これがひとり親家庭になりますと、約6割に跳ね上がることになってしまっています。

相対的貧困の計算式は今日お示しませんが、これは各国で経済状態が違いますから、統一な計算式があるのです。それにもとづいて計算しますと、今、日本の収入の在り方で考えますと、可処分所得が年収122万円以下で生活している家庭が相対的貧困家庭と呼ばれると一般には言われます。そういう家庭に子どもの7人に1人ぐらいいるということになっていて、OECD諸国の中で悪い方から10番目ぐらいなのです。これがひとり親家庭になると、一番悪いと言われる社会になってしまっています。

否定的な話ばかりしますけれども、厚労省と研究会をやっていたのですが、認知症を患う方が今500万人ぐらいいらっしやって、あと5年で730万になるという予測が出ていて、高齢者の2割になるのです。それがあと40年たちますと、1,150万人を超えと言われて、その頃人口は8,700万人ですので、総人口の13%、約8人に1人が認知症を患うようになるだろうと言われるのです。つまり、認知症を患う人たちと、どう社会の中で共存するのか、共生するのかといったことが問われているのです。これは言い方を変えると、障害という概念を変えない限り共存できないということになりかねないということなのです。その意味では、障害も含めて、多様性をどう社会に実装するかが問われてしまっているということになります。

さらに、今回のコロナの問題で、生活をどう変えるかということが問われています。今までは、通勤や通学をして、時間と空間を切り分けて、行った先の決まりとか規範に自ら身を置いて、そこで生活のリズムを作って、例えば通勤できる、会社に勤めることができる身体になったり、企業社会の価値観を持ったり、さらにはそのための教育や訓練を受けてきたわけですけれども、これからはリモートの生活が始まる中で、1日の生活時間の中にどうやって「働くこと」を組み込んで、自分で自分の生活を律するのかということや、どうやって自分と地域コミュニティの関係をつけるのか、どうやって自分と家族の関係をつけるのかということや、全部、自分で考えて、やらなければいけなくなってきたということなのです。その意味では、自分で自分の生活をきっちりと律することができる子どもたちを育成する必要があるのではないかということでもあります。

そういうことを考えていきますと、価値観を変える必要があるだろうということなのです。今までは、人間として皆同じなのだから、あるいは働ける力を持っているのだから、同じように扱いますよという社会でした。そうすると、質が同じだという前提になるので、簡単に言えば、同じ尺度をあてがってやれば量化できるという発想で作られているのが、今までの制度だったのです。量化というのは点数化ですから、点数の多い少ないでその子の位置づけが決まるということになりますし、そのことにおいては序列化の社会であったということなのです。もっと言えば、社会の中の位置づけが、本人の価値を決めるような扱い方になっていたということになるわけですけれども、これを変えなければいけないだろうということなのです。みんな同じなのだから、平等に扱え、公平に扱えと言われてきたのですが、これからはみんな違っているのだから比べてはいけないのだということや前提にして、だから平等に扱う必要がある、ということにならなければならない。これはどういうことかということや、序列化しない、または評価をしないという形への社会の組み換えを必要とするということなのではないかということなのです。

その意味では、比較や競争ではなくて、協働とか、いわゆる一緒に創り出すという共創が求められますし、相互に認め合うという形で、一人ひとりに居場所がきちんとあるのだという社会を作る必要があるのではないかと。そうすると、人と人との関係性ですとか、「間（あいだ）」といったことが大事になるのだろうということなのです。あれこれ難しいことが書いてありますけれども、簡単に言えば、言葉を

使ってきちんと関係を作れるし、自分のことを話すことができるし、相手のことを聞けるし、自分と相手の「間」をきちんと言葉で作りに、表現できるような子どもたちを育成する必要があるのではないかということでもあり、そうやって自分たちが社会の一員としてこの社会を作っているのだと思えるような関係のあり方が必要ではないか。それこそが対話的な関係ということになるのではないかということなのです。

そして、同じだから平等ではなくて、異なるから平等なのだとか、異なるから一緒にいられるのだという形の価値の在り方をつくっていく必要があるだろうということなのです。「間（あいだ）」としての私たちや私という在り方を作る。言い方を変えると、人と人との「間」を個人を前提に考えると、「間（あいだ）」というのは「間（はざま）」にもなってしまって、そこに落ち込むと人が見えなくなってしまうかもしれませんが、もう一度その「間（はざま）」を埋めながら、「間（あいだ）」として作り出して行って、そこから新しい物を作り出すような関係がこれからの社会では必要ではないかということなのです。

例えばそれを、アフォーダンスやモディファイド・アフォーダンスという考え方でとらえられないかと思います。今までは、アーキテクチャとあって、枠にはめ込むことを社会の1つの仕組みとして持ってきたのですが、一旦その枠を外してみると、自分に対して他者や環境が訴えてくるものを受けとめていくのがアフォーダンスの基本なのです。意味するものを受けとめて、新しい意味や価値を生み出すということなのですが、ここでは、新しく価値を作り出している自分を感じ取ることも必要ではないかということなのです。そして、誰かと一緒になって新しい価値を作り出し続ける自分がそこにおいて、だからこそお互い違っていることが大事だよという関係になることのほうがこの社会にとっては重要なのだという社会の在り方があるのではないかということなのです。

例えば、少し長くなってしまいますけれども、こういうエッセイがあります。お姉さんと弟がいて、弟がお姉さんにジューサーミキサーを送ったのです。でも、壊れていたのです。その壊れていたジューサーミキサーを受け取ったお姉さんからの手紙という設定で、こういう手紙が書かれてあるのです。

「あなたが送ってくれたジューサーミキサーは壊れていました。出して机の上に置いてみると、壊れたジューサーミキサーは、まずジューサーミキサーという名前

から解放されて、新しい名前を欲しいと言っているように見えます。さらに、ジュースミキサーとして使えないので、ジュースミキサーとしての機能からも解放されて、何だか別の存在感を持って私のテーブルの上に乗っかっています。」という手紙なのです。それで、「ありがとう」という手紙なのです。

ジュースミキサーであればそのとおりに使わなきゃいけないし、ジュースミキサーとして作られているわけですから、名前がついていて、使うようになって、指定されています。ですから、壊れているというのは、そういうふうに使えないので、本当は価値がないことになるわけですがけれども、そのお姉さんはそれを置いてみたらジュースじゃなくたってよかったんじゃないかと思えてきてしまった。そのものを見ることによって、新しい意味がそのものから訴えかけられてきて、それを受けとめていくと、これはジュースじゃなくたっていいんじゃないか。例えば花瓶でもいいんじゃないか、何かオブジェでもいいんじゃないかと思えてきたということを行っているわけです。

ただ、問題はそこから先なのです。それはアフォーダンスなのですからけれども、そこから先なのです。なぜ「ありがとう」とお姉さんが言うのかということなのです。それは多分、これは私の勝手な解釈ですがけれども、お姉さんと弟がいい関係があるところに、それが送られてきて、それがジュースミキサーではなくて、新しい価値を持ち始めたときに、お姉さんもそのジュースミキサーをジュースミキサーとして使うという指定から解放された気持ちを持ったのではないかと。意味とか何かを外部から指定されて、私たちがそれを使おうとするのだけれども、その使うように指定されていることから解放されることによって、それを新しいものとして見ている私自身を感じ取ってうれしくなったのではないかと。だから、「ありがとう」と言えるのではないかと。これはモディファイド・アフォーダンスにつながっていくのだと思います。

その意味では、自分自身がそこで変わっていくことを感じ取りながら、弟との関係が新しくなっていくことになるのではないかとということでもある。これがもしも通販で買ったと思ったら、多分怒って送り返したり、クレームをつけているはずなのですが、弟が送ってくれたということがあって、その意味づけが新しくなってくることに感動している自分を感じ取っているのではないかとということなのです。そういう意味では、従来のようなつながりの在り方では、もしかしたら抑圧関係になっ

てしまったり、また評価をして抑え込んでしまうということが往々にして起こるのですが、そうしないようなかかわりのあり方を作っていかなければいけないのではないかと思います。

例えば、これは副会長のご専門なのですが、障害者の当事者研究があって、そこでは暇と退屈が怖いという話になるのです。なぜ怖いのかというと、暇と退屈だと、過去のをほじくり返して、トラウマにとらわれてしまって精神が動揺するからなのです。例えば、私たちが関わっている非行少年たちも、シンナーを吸ったり、薬物に手を出したりしたときに叱られて、「何でこんなことをやったんだ」と言われると、「暇だったから」と言うのです。

そのときに、真面目な先生方は「暇でそんなことをするな」「真面目に答えろ」と怒るわけですが、本当に暇だと怖いんですね。例えば家の中の虐待のことが思い出されてきてしまったり、貧困で、塾に行けなくて、みんなからばかにされた経験がよみがえってきたり、いろんなことが起こる中で、薬物に手を出してしまって、忘れようとするとか、区切りをつけようとするものが起こったりするのです。

そういう精神的な動揺を回避するために、暇と退屈を何とかして埋めて次に行こうとする。そこに依存症などの問題が出てきてしまうのです。しかし、暇と退屈というのは文化の根源でもあると言われているのです。では、どこが違ってくるのかというと、簡単に言いますと、関係性が物を言うのではないか。孤立したまま暇と退屈に置かれてしまうと、そこを断ち切ろうとして、依存ですとか、中毒というような問題に手を出してしまうのですが、そこに共感的な他者がきちんといることによって、一緒に次に行こうねという環境を作ってもらえることによって、暇と退屈は余裕と創造につながっていくのではないか。それが内発的な動機につながっていくことで、自分がそこでしっかりと新しいものになっていけるのだという、ある種の確信が持てるようなことがあるのではないかということなのです。その意味で、そうしたものを「学び」としてきっちり捉えていく必要がある。そのときに、私たちが子どものことをどう慮って、想像力を持って子どもに当たっていくのか。イマジネーションを持ってということなのですね。そういったことが必要ではないか。

その意味では、評価をするということではなくて、認め合える関係を作ることが大事で、これは先日のシンポジウムでも申し上げたのですが、PDCAを回せと言

われて、多分、教育委員会の皆さんも苦労されていると思うのです。私自身も文科省に関わっていると、すぐPDCAと言われるので、一生懸命反対しているのですけれども、評価できないだろ、と叱られるのです。ただ、PDCA、プラン・ドゥ・チェック・アクトで回すというのですけれども、教育ではこのサイクルが回らないのです。これは、もともと単一の尺度で計れるものの歩留りを高めるための手法なので、因果関係の直線的な一対一対応の関係のところでは、これは作用しないのです。教育みたいに複雑なものが関わって動いているもので、これを無理に回してしまうと、縮小していったり、壊れてしまうのです。

あと、計画どおりいっていないというチェックをされてしまうと、評価されたことになって、次回から計画どおりいくように計画を立てろと言われてしまうので、縮小していったりしてしまうのです。どんどん悪くなっていってしまいます。それに対して、私たちがいろいろ関わっていく中で見えてくるのはこういう関係で、今、実はOECDなんかも言い始めているのですけれども、AARと言ったりしますが、Anticipation、Action、Reflectionなのです。

Anticipationとは何かというと、直訳すれば「予期する・予測する」ということなのですが、ちょっと裏の意味があって、予測してワクワクするとか、予期してうれしくなってしまうという意味が入っているのです。そうしたものをベースにしながらやってみて、Reflection、評価しないのです。振り返ってみて、うまくいってればもっとやっちゃおうとなりますし、うまくいかなければちょっと変えてやってみようかなと思えるようになってくる。これは、ある意味では開放系の循環、試行錯誤の体系を持つようになっていくということですし、どんどん次へ次へという駆動力が働くようになってくるということなのです。それは多分、楽しいことなのではないか。自分がどんどん変わっていくし、何かできてしまうし、うきうき、ワクワクしてしまうのではないかということなのです。そうしたものが、学ばないではいられないといったことにつながっていく。これが本来の在り方なのではないか。

すみません。このあたりで終わりにしたいと思いますが、新しい学習指導要領についてはあれこれ言われていますけれども、関わった者としては、基本的には言語と体験をきっちり、対話的な関係の中で、ということなのです。社会に開かれた教育課程、と2015年8月に中教審の教育課程企画特別部会が言い始めて、この学習指

導要領は作られました。簡単に言えば、もう学校では教育課程は終わらないという話なのです。なぜこんなことを言い始めたかという、先ほど申し上げた人生100年の時代で、社会がどんどん変わっていく中で、学校教育で知的な活動を完結させてしまうのはまずいだろうという話になっているということなのです。子どもたちが自分で自分の人生を作っていくのにどうしたらいいのか。もう大人が教えられないのだということを前提で考える必要があるだろうということなのです。

そうすると、彼らにつけてもらいたいものが「生きる力」と言われるものなのですが、では、一体それは何なのかということになると、分からないのです。けれども、自分で生きる力をつけて、自分で自分の人生を切り拓いていく、また、創っていける力をつけてほしいという願いはある。では、どうするかというと、基本的には言語をきちんと使って、対話的な関係において、他者と対話しながら、お互いに理解、承認関係を作り続けて、新しいものを作り出していく力を持ってほしい。そのときの基盤になるものは社会体験だろうということになって、体験活動を組み込んでおきたいという話になってきたということなのです。

それで、コミュニティ・スクールの構想が出てきて、2015年12月に、同じ日に3つの答申が出されたのです。アクティブ・ラーニングの答申、チーム学校答申、地域学校協働答申というものです。これは簡単に言えば、学校に地域を招き入れて、地域が学校を支えるのではなくて、学校と地域が一緒になって子どもを育ててくださいという答申なのです。

アクティブ・ラーニングは意識がされていまして、「主体的で対話的な深い学び」ということになっています。これは、子どもたちが自ら関心を持って、センス・オブ・ワンダー、好奇心を持って主体的にかかわりつつ、対話的な関係に入って、さらに人と対話する中で新しい価値を探求したり、作り出したりするような深い学びをしてほしいということなのです。そのために先生方の教育の在り方も変えてください、教員養成の在り方も変えましょうというのが第一次答申なのです。

2つ目のチーム学校答申は、ただ、そうはいっても、先生方はいまとても多忙で、働き方改革の問題もありますから、先生方が教育の専門職として子どもたちに寄り添って、アクティブ・ラーニングができるような学校の体系を組み換えましょうという議論になっているということなのです。

その中で大きなものとしては、例えば貧困問題を学校が抱え込んでしまっていま

す。例えばある県のある小学校は、朝、給食を出し始めたりしているのです。これは、子どもが朝御飯を食べてこないとか、長期休暇後、痩せているという報告が上がってくるからなのです。校長先生がパンやお菓子やバナナを買っておいて、「おなかが減ったら食べにいらっしやい」と言っている学校がかなりあるのです。そういうものを学校の先生方が全部抱え込むのではなくて、それは地域の方々や、またはスクールソーシャルワーカーのような方々を入れて、きちんと役割を持っていただいて、学校がしっかりと機能するようにしてほしいというのがこの2つ目の答申の考え方なのです。

3つ目は、それをさらに実現するために地域がどう関わるのか。今までは学校支援地域本部という形で、地域が学校を支えましょうと言ってきたのですが、これからは地域と学校が協働するという考え方に立ってほしいということなのです。その意味では、地域が学校を支援するのではなくて、極端なことを言えば、学校から子どもを引き出して、地域で様々な体験活動や教育活動が展開される中に子どもを巻き込んで、子どもに生きる力をつけてほしいというのが第3答申なのです。

これらをひっくるめてコミュニティ・スクールなのです。学校運営協議会を作っても、地域の方々もそこに入って、学校の経営方針なども議論をするのですが、ここでまたいろいろ問題が起こるのです。学校に対して地域の方々が意見を言ったら、学校が引き受けるということもあるのですが、答申の「心」は、言った以上、地域で責任をとってくださいというのが学校運営協議会の考え方、理念なのです。ですから、学校が抱え込まないでくださいというのが本当の意図なのです。ただ、何となくまだ学校中心で物を考えてしまいますので、地域が関わってくると学校がどんどん多忙になって、先生方の負担が増えて嫌だとおっしゃるのですが、本当はそうではないということなのです。もう少しきちんと現場でそれが実装できるような仕組みを作っていただけないかということです。

さらにもう1つは教育内容です。従来、「STEM」が重要だと言われてきたのです。いわゆる理科系の学問とか教科です。サイエンスとテクノロジーとエンジニアリングとマスマティクスなのですが、私たちのような文系人間は要らないと一時言われたのです。ですが、今や「STEAM」と言われて、「A」が入ってきた。Aとは何かというと、アートなのです。芸術なのですけれども、さらにリ

ベラルアーツが入っています。「教養」と訳されるものです。リベラルアーツとは何かというと、リベラルというのは「自由」と訳しますし、リベラルアーツを直訳すれば「自由学芸」と訳すのですが、もともとリベラルという意味は、「気前がよい」という意味なのです。気前がよい、だから自由だ。どういうことかということ、目先の利益にとらわれがなくなっていく。もっと大局的に自分の人生や社会を俯瞰できるようになっていく力がつくという意味で、それを「教養」というのです。そういう力をつけていかないと、理科系の学問もうまく運用できなくなるのではないかということになってきています。

このあたりで終わりにしたいと思いますが、その意味では、今のカリキュラムは、実は就学前教育から高校まで初めて15年間一貫したものとなったのです。なぜかということ、人生100年の中の15年間しかないという考え方なのです。15年間で、それから後、学び続ける力の基盤を作ってほしいということであって、15年間で学んだことを応用し続けて100年生きてくださいということではないということなのです。そこをやはりきちっと考えなければいけないのではないかと思います。

さらに、社会としっかりと連携しておくことが必要になってくる。その意味では、私たちの言葉で言い換えれば、自分の状況に応じながら、学びを一生涯それぞれが発見し続けるということになるのではないか。そのときには、知識を自分だけのものにしておくとか、知識の伝達が学びだということではなくて、むしろ他者とのやりとり、つまり対話しながら新しいものを作り出し続けていくことが学びなのだということになる。

そして、そこでうれしい感覚を持ったり、発見してびっくりして、もっとやってみようと思ったりすることを大事にしながら、一生新しい自分を作り続けていくことが学びのプロセスになるのではないか。そこでは例えば老若男女ですとか、障害のありなしということにかかわらず、それぞれがきちりといろんな関係の中で自分というものを作ることができるような社会の在り方、そうしたことが学びを通して問われてきているのではないかということなのです。

もう一度申し上げますけれども、センス・オブ・ワンダーというのは、不思議に思うことが探求につながり、それが自分の人生に関わってくるような生き方をしていくということ。もっと言えば、違っているからこそ一緒にいられるのだと思えるような関係を作っていくこと。同じだから平等ではなくて、違っているからこそ新

しい価値を自分たちがどんどん作り出して、新しい自分になっていけるのだと思えるような社会をつくること、そうしたことが今の教育改革で問われているのではないかということなのです。

すみません。長くなりましたけれども、以上のようなことを基本にしながら中教審の中でも議論をしてきましたので、私あまり方向づけてはいけないと思いますが、皆さんにもこうしたことをたたき台にさせていただいて、これからの杉並区の教育ビジョンについての少し具体的なイメージを、今日はお出しただければと思っておりますので、よろしく願いいたします。

では、ここから議事に入らせていただきたいと思います。

先ほどの議題で、(1) (2) (3) と分けていただきましたけれども、ここから皆さんからご意見を頂きたいと思っておりますので、お願いいたします。

まず最初に、本日席上で配付されております資料22「『杉並区教育ビジョン』に対する区民等のアンケートの実施結果について」の内容について事務局の担当の方から補足をいただければと思っておりますので、お願いいたします。

○事務局 資料22を御覧ください。前回、審議会でも子どもたちの意見をお聞きになられたいのご意見を踏まえまして、子どもから大人まで幅広い年齢層から回答することができる機会としてアンケートを実施することとし、ホームページによる周知のほか、区立子供園や学校に在籍する子どもたちに直接配布することができます、すぎなみ教育報を活用して呼びかけをいたしました。

1の実績でございますが、こちらには親子による回答ですとか、学校で取り組んでくださったものもございます。団体には学校運営協議会や学校支援本部、PTAのほか、学校で6年生100名の意見をまとめて提出してくれたものもございます。なお、個人情報には削除させていただき、漢字や平仮名の表記を統一するほかは原文を基本的に尊重しております。記載がなかったものにつきましては「回答なし」と表記しております。

初めに、別紙の1-1ですが、小・中学生からの意見です。質問は大きく分けて3点、望む学校、望む10年後のまち、将来どんな大人になりたいかとしています。子どもたちが回答しやすいような文言や質問ステップになりますよう、子供園の園長先生、それから校長からアドバイスを頂戴しました。

右側の質問6では、人から言われたら、うれしくて頑張ろうと思える一言を教え

てもらいました。子どもたちは、「すごいね」とか、「がんばって」と言われたりすることがうれしくて、それをもらおうと頑張ろうと思えるそうです。このような言葉を伝え合い、お互いを大切にできるような杉並でいたいと願うものです。

続きまして、別紙1－2ですが、小・中学生から多く寄せていただいたキーワードを分類したものになります。分析とまではいきませんが、まとめた事務局としての気づきという観点から申し上げます。

上段の望む学校については、「みんなにとって」どうかとか、「誰もが」といった他者を尊重する意見が多く寄せられました。「楽しくて、勉強できる学校」には、キーワードとして「楽しめる行事」ですとか、「楽しい学校」「楽しくて、勉強もできる学校」などを抽出しております。

また、次の「いじめやけんかのない学校」については、「いじめがない」「けんかがない」「暴力や仲間外れがない」「不登校がない」といったキーワードが寄せられております。

また、下段の望む10年後のまちについては、初めに子どもたち、今の杉並のまちのよさとして、まちがきれいなこと、ごみやポイ捨てがないこと、自然や緑があること、犯罪が少ないことを多く上げておまして、引き続き今後もそのようなまちを望んでいるという傾向がございました。

また、将来なりたい大人につきましては、ユーチューバーを含め多岐にわたる職業などがありましたので、分類することを避けましたが、「やさしい人になりたい」との意見が多くありました。いずれにしても、望むまちの実現に向けて自分にできることは何か、どんなことを頑張ろうと思えますかとの問いかけにより、私にはできることがあるとの当事者としてのアイデアが出てきたと思います。

最後に、別紙2を御覧ください。大人の意見です。

望む10年後のまちと子どもたちのために自分はこんなことができるというご意見を聞かせていただきました。全ての人挑戦できるまち、それぞれが活躍できる居場所や仕組み、ともに学び、ともにワクワクする関係を作りたいといったご意見が多く見受けられ、そのためには子どもたちの意見を尊重し、子どもも大人同士も多様な考えを認め合い、安心して気持ちを話すことができる交流を大切に考えられていました。また、できることがあるのだけれども、一步踏み出すきっかけを探していらっしゃる方も複数いらっしゃいました。

ご紹介は一部でございますが、原文にはすてきなキーワードや具体的な取組が多数寄せられております。杉並の教育を共に考えることができるたくさんの子どもと大人の意見に心強く感じております。どうぞご審議にご活用くださいますようお願いいたします。

私からは以上です。

○会長 ありがとうございます。

詳しくはこれから皆さんに帰ってから読んでいただくことになるかと思えますけれども、とてもたくさんの方々から積極的なご意見を頂けたのではないかと思います。

それから、今、事務局からのご説明にもありましたように、ある種、つながっていたいということですか、お互い認め合いたいですか、さらには、新しいものに向かって次に行けるような関係性を求めていच्छるのではないかという印象もあるのです。そのことも含めて、今日は、この次第にあります意見交換のところで、「10年後の杉並の子どもたちのために私たちができること」ですか、「新たな教育ビジョンに盛り込むべき視点（キーワード）」ですか、「教育に関する取組の基本的な方向性」等に関して、順を追ってということではありませんので、皆さんのほうからご自由にご意見を頂ければと思いますけれども、いかがでしょうか。よろしくお願いいたします。

○委員 よろしくお願ひします。どうもありがとうございます。

具体的な議論に行く前に、前回の概要とか、今回のアンケートや議事の構成も見ながら気がついたことがあって、少し前提の確認をさせていただきたいんです。今回検討する教育ビジョン、教育振興基本計画の位置づけ、あるいはその対象者についてももう一回確認をさせていただければと思います。

というのは、教育の対象、あるいは向こう側から言えば学習者になるのかもしれないんですけれども、子どもが中心なのか、そうではなくて区民全世代か、どの年齢層を対象にしているのかというところで、前回の意見概要、資料18を見直してみたり、今日の議事の（1）で最初に「子どもたちのために」という言葉が出てくるんですけれども、これからの10年間、例えば0歳の子が10歳になります、5歳の子どもが15歳になります、10歳の子どもが20歳になります、そこの学びはそれはそれで教育や学びとしてあると思うんですけれども、予想不可能な時代にいるというの

は、例えば今の20歳の人も30歳の人もみんな一緒に、その人たちも学び続けられなきゃいけない時代になっていくのかなと思っています。

そのときに我々が議論する教育ビジョンは、子どもたちが中心なのか。例えば、今30歳の区民がこれから10年間どう学ぶべきか、あるいは60歳の人たちが70歳になるまでどう学ぶべきか、そういうところまで議論の範囲なのか、会長なのか事務局なのか分かりませんが、まず、そのあたりの位置づけ、議論のフレームを確認させていただければと思います。

○会長 どうもありがとうございます。

事務局から、今までのことで結構ですので、今までの教育ビジョンがどういう位置づけであったかについて少しお話いただけますでしょうか。

○庶務課長 お手元にお配りしております「杉並区教育ビジョン2012」をお開きいただければと思いますが、そこの13ページになります。我々が目指している学びを捉えた場合、今、子どもというところでお話がありましたけれども、乳幼児期から学齢期、そして成人期、高齢期と全ての学びの支え、また循環していく、そういう概念で捉えておりますので、全ての区民の皆様にというところでご議論いただけたらと思います。

○会長 よろしいでしょうか。この教育ビジョンは、今、私と大竹委員も関わっています区のマスタープラン、基本構想の中に教育に関する内容も含まれておりまして、それと整合を図った区の教育ビジョンとして出されるということですので、簡単に言えばこれは区の行政の1つ、今後の教育行政の方向性を大枠として決めていくものになるのだらうと思います。

そのときに、前回、私たちも「子どもたちのために」とつい言ってしまっているけれども、どうしても子どもたちを中心に、その子たちが10年後どういう大人になってほしいかという形で作ってきたところがあるかと思うのですが、今、委員がおっしゃったように、大人たちも変わらなければいけないのかもしれないし、生涯学習とか、100年というキーワードが出てくるような時代に入っていますので、その意味では子どもだけではなくて、子どもたちをどう支援したいのかといったことと同時に、むしろ大人がどう変わるのかというようなことも含めて議論ができればよりよいかと思います。今回の新しいビジョンの策定では、子どもたちだけではなくて、そこに関わる大人もどうするのかといったことを少し議論できればと思います。

けれども、いかがでしょうか。難しいかもしれませんが。よろしいでしょうか。

それでは、いかがでしょう。最初、ちょっと方向づけし過ぎてしまったかなという不安もあるのですが、皆さんのほうからご自由にご意見を頂ければと思います。

○副会長 今、会長が言われた、一人も取り残さないとか、孤立させないという話は、まさに小・中学生や大人たちのアンケートの内容と合致している気がしまして、そういう意味では、これが中心的な概念として座っていくのは非常に大事なんだろうなと思って伺っていました。

そのときに我々として、例えば一人も取り残さないという中に、今後10年と考えると、ニューカマーの子どもたちが今以上にもっと増えるはずで、そういう子たちのことが明確にこの計画の中に書き込まれていくことが大事なんだろうという気がします。ここの中にニューカマーの人たちは誰も、恐らくいないんじゃないかと思えますけれども、そういう人たちが外されてしまうと、次に外される人も出てくるということですよね。それが往々にして学校の中では障害を持ったお子さんが外されていくということにつながっていきかねないので、一番弱い存在として考えたときのニューカマーというのははっきり位置づけたらいいんだろうという気がします。

それから、やっぱり学校の機能が明確に変わるということを今回は強調すべきなんです。それは、子どもたちが狭義の学力をつける場から、子どもを中心とした学びのプラットフォーム、もしくは居場所機能が中心になるような場として学校が再定義され、ある意味、子どもと関わることを通して大人も学んでいくとか、生涯学習との接合であるとか、教師自身もまた子どもと出会うことによって学び直しながら、自らの専門性を高めていくとか、そういう形で学びが重層的に膨らんでいくプラットフォームみたいな存在として学校が再定義されていくことが非常に重要なんだと。

さらに、非常におもしろいなと思ったのは、学び自体も再定義されなきゃいけないということですよね。つまり、この「一人も取り残さない」というのは、アメリカだと「ノー・チャイルド・レフト・ビハインド法」というのがあって、それが出た当時は非常にもてはやされたわけですけども、たしか結果的にどの子にも学力をつけなくてはいけないみたいなチンケな話になっていった。そうすると、テスト

潰けになって、排除される子どもが出てきたというのがアメリカで進んでいることですよね。だから「一人も取り残さない」というこの言葉をもう少し砕いていく必要があって、でないと、誰もが認めるような、いい言葉が排除の概念として使われていくというのが学校で起きてきたことですよね。

例えば「けんかのない学校」を理想に掲げている子どもがいますけれども、「けんかのない学校」を掲げると、けんかを起こす子どもが厄介な子として排除されてしまうというロジックで学校現場が進んできた側面がありますから、その意味でもこの学びというのが、おっしゃられたような形のリベラルアーツをもっと含み込むような形で、子どもたちの広い意味での学習権を保障するような、それが表現の権利であったり、思想信条の自由であったり、そういったものがもっと豊かになっていくような学びが保障される場としての学校。学習の再定義というのも、今日、会長がしてくださっていますけれども、このあたりも明確な言葉の中で書き込んでいくことが必要なんだろうなというのが私の感想です。

○会長 ありがとうございます。では、お願いいたします。

○委員 会長、プレゼンありがとうございます。12日のプレゼンを伺ったときに欲しいなと思っていたスライドなので、本当にうれしいです。また、副会長の今の話も本当にそのとおりでなと思います。やはり対象が全ての区民ということがすごく大事で、学校が変わるためには、保護者を中心にしてもいいかもしれませんが、学校を取り巻く地域の意識が変わっていかないとなかなか変わる勇氣あるいはきっかけのようなものは持てないだろうと思います。

実は私、就学相談をしていて、最近こんな話がありました。就学時健康診断というのがあるんですね。そこであるお子さんが、四角を書いてねというところを、四角じゃなくて何か自分の好きな絵をいっぱい書いちゃったと。ちょっと落ち着きもなかったので、校長室に呼ばれて面接を受けたそうです。

その面接で、スクールカウンセラーか誰か分かりませんが、学校に入ったら大変だから、お母さんがちゃんとおうちでフォローしてくださいねと言われて、一体何をすればいいんだろうと思って就学の相談に来たというのです。それって何だろうなと。そういういっぱい絵を描いちゃう子どもを、「いや、おもしろい子が今度学校に来るなあ」と受け止められない学校があるわけですよ。あと、席を立ち歩くということ。ずっと座って授業を受けなければいけないという1つの学校の在

り方、それは本当に必要なことなのか、と考えさせられました。

それから、今、中教審のまとめを見てちょっと愕然としたのは、教科担任制をとるということなんです。教科でばらばらに教えているから、何を学ぶのかがわかりづらくなった、そのためのカリキュラム・マネジメントじゃないのかと思います。そうすると、本当に根本的に学校の在り方を変えていかないとまずい。でも、それは学校だけでは勇気が出ない。やっぱり周りの支持がないと難しいんだろうなと思うんですね。そういう意味で、地域でいろんな学びの場があるということをお示ししていくことがすごく大事になってくると思いました。

あと、先生のお話の中で言葉ということがありました。これは、言葉がしゃべれるということに定義しちゃうとまずいと思いました。今、副会長が言われたような障害のある方、外国人の方、日本語がしゃべれないわけですよ。でも、その人たちともコミュニケーションが成り立っていく。そこに新たな関係性が生まれてくるというところまでを含めた言葉の育成という視点を持っていきたいなと思いました。ちょっと雑駁な感想で申し訳ありません。

○会長 どうもありがとうございます。では、お願いいたします。

○委員 会長、ありがとうございます。すごくおもしろかったです。おもしろいというのは失礼ですけれども、これはいい言葉で、私は「おもしろい」という言葉に価値があると思っています。

先生が最初、センス・オブ・ワンダーを出されて、今、私はこの意見区分Aのところ、区立子供園の園長先生の方から「『はてなの連鎖』が展開される教育・保育を保障する」と出ていまして、まさにそのことだなと思うのです。それが乳児から幼児から大人まで、自分自身の「はてなの連鎖」を追求できる。1人でも追求するし、他者と協働しながら追求できるというのが展開できたら、きっと気持ちも楽し、学びが深まっていくんじゃないかとまず1つ思いました。

私は、子どもの場合は遊びの中でおもしろさを追求して行って、「遊び課題を生成している」と言っているんですけども、自分の体験を通して学びを編集していく。そうすると、そこに必要なスキルが出てきたり、知識が必要になってきたときに、初めてそれが生きる力として生かされていくというか、実際に役立っていくのだらうと思います。そのことを1つ感じました。「はてなの連鎖」っていい言葉だなと思いました。

それからもう1つが、そのとき「つながる」というと、そこに意思が必要な場合もあると思うんですけれども、それ以前に私たちが「ひと連なり」であるという意識の改革が必要だと思います。自分は地球の一部で、ヒトは動物の一種で、私たちはずっと自然界や地球と「ひと連なり」の存在であるということを子どもたちも大人も認識していく必要があるのかなと思いました。地球温暖化の問題は、きっと10年後、20年後はもっと真剣に考えていかなきゃいけない、抜本的にも在り方を考えていかなければいけなくて、そのときに自分たちは連なっているんだということを考えると、どういう意思を持ってつながる必要があるのかということが生まれてくるような気がしました。

そのときに、さっき学びのプラットフォームの話があって、恐らく組織的にプラットフォームを作ろうとすると、すごいガチガチになっていくのだろうけれども、自然発生的な共同体と言ったらいいんでしょうか。何と言ったらいいのか、ゲマインシャフト的なのというか。そこに来ることによって本当にみんながワクワクして、つながりたいからそこに集まり、そして、自然発生的に何かが起こるといようなことが学校や子供園、保育園を中心にプラットフォームになって、展開していくような教育が行われていくとうれしいなと思います。今、地域といっても、地域に実態がないわけなので、どこかが確かな実態として存在するには、学校という施設や、保育園、子供園という施設が大きな役割をこれから果たすのかなと思いました。

最後にもう1つ、今言葉の話が出て、私は専門が幼児なので、幼児の場合、言葉の前の言葉がとても大事です。感覚として、いろいろな体験を通して感じて、自分なりに表現する。そして、自分の中で感じたことを自分の言葉で目の前の相手に伝えるということをたくさん体験させて、それから小学校ぐらいになると、そこにいない人にも伝える言葉を獲得していくのだと思うので、言葉とおしゃった中に、それぞれの立場に発達もあるのかなと感じました。

私は、ちょっと卒論の指導で忙しくてこの意見書を提出しなかったのも、また後でちょっとお話ししたいと思います。

○会長 どうもありがとうございました。先ほど副会長、各委員からですね。ざっくりまとめてしまうと、概念を変えましょう、観念を変えましょうというお話をされたのだろうと思うのです。

私たちが今まで思ってきた、学校とはこういう場所なのだということを一遍取り払って見たらどんな場所に見えるだろうかですとか、子どもってこういう存在なのだといったことを一遍取り払うと、どう見えるかというようなことを議論する。そういうことの中で、新しい在り方といいますか、今まで私たちが慣れ親しんできた社会の在り方ではない社会に入ろうとしている中で、学びの場であったり、学びの在り方であったり、また、学びという概念そのものがどう変わるべきなのかを少し議論ができればということだと思えます。ほかの委員の方々、いかがでしょうか。

何か難しいことを言っているようになってしまうので、できるだけ生活感覚で、といいますか、子育てをされていく中で感じたことで結構ですので、ぜひお出しただければと思います。

○委員 今、委員もおっしゃっていたように、キーワードで「学び」というと、どうしても我々の学びは学習というイメージがついてしまうので、子どもの視点からすると、これは「遊び」。だから、「学び」と「遊び」という言葉を両輪として使っていたほうがいいのかなど。「遊び」というのは楽しいことでもあるし、それは子どもだけの世界ではなくて、大人の時代であっても、「遊び」はすごく重要になってくる。

そして、子どもの権利条約の31条でも、やはり遊びは子どもの権利でもあるし、そこに合わせて休息の権利が子どもたちにもあるんだと。人生100年と考えたときに、15年で完結するのではなくて、子どもによってはもう少し時間をかけてゆっくりじっくり。時には休んで、そして学び直していくという、期間設定ではないけれども、もっと社会がゆっくりじっくり学ぶ。そして、休息のとれるような、それが認められるような、一旦一休みしようよと。

それは私たち大人にとっても、我々大学の教員は研究休暇があって、あの休暇がすごく重要で、1年間とか、大学によっては2年間とか、時を止められる。そして、もう一度今まで走ってきたところ、自分の研究の原点に戻って、また時間を与えられてゆっくりと学び直す。この機会が与えられるのはすごく重要で、僕は保育士養成をやっているけれども、保育の現場の先生たちも、1年とは言わないけれども、数年働いたら1カ月でも休みが与えられたら、リフレッシュしてまた子どもに向かい合える、そんなような社会の在り方を考えられるといいのかなと。ですから、「学び」ということと、我々はいつも「学び・遊び」という言葉で一緒にくく

って話していったほうが、区民の人たち、子どもたちにも落ちていくのかなと。

あともう1つは、子ども期の発見。子どもは小さな大人ではないんだと。子ども期というのがあるんだというときに、川崎の子どもの権利条例はすごく進んでいて、子どもの権利委員会や子ども会議が作られています。子ども会議で、最後に子どもたちが大人に向けて何を言ったかという、「子どもだけが幸せになれるのではありません。大人の人たちも幸せになってください」というコメントを子どもたちから出してくるんですね。

ですから、親の幸せがあって子どもの幸せがあるんだということを子どもたちも分かっているんですね。大人はみんな一生懸命子どもの幸せというけれども、自分たちもみんな幸せになってくださいねというのを子どもたちから発信されていく。こういう子どもたちに感性があり、力があるんだと。子どもの再発見、再認識。子どもの力という、そんなところを私たちはもう一度確認していきたいなと改めて思いました。ありがとうございます。

○会長 ありがとうございます。学びというと、また今までの概念で考えてしまうので、それを崩すような「学び・遊び」ですとか、そういう形で捉えていったらどうかということと、従来のように子どもたちを、ちょっときつい言い方をすると、大人の従属物みたいに見ないということですね。むしろ1人の人格を持った存在として捉えつつ、どういう関係を作るのか。当然、指導することはあり得るかもしれませんが、むしろ保護され、指導される存在だけではないのだという受け止めの中で、子どもたちの新しい在り方を考える、それは当然大人の在り方にも関わってくるというお話だったのではないかと思います。

ほかにいかがでしょうか。ほかの委員の方々。

○委員 会長、ありがとうございます。会長のお話でも、これからは子どもたちにいろんなことを体験させて、そこから新しい学びのようなものが生まれてくるという中で、地域がより深く学校教育にも関わっていく必要があるんだということはすごく分かりました。ただ、その支える地域、具体的にどういう形で支えていくのか、地域という実態のないその中から、協力できる人たちを地域も育てていかないといけない。地域もやはり学んでいかなければいけない。そういう仕組みをどうやって作っていくのがすごく大切じゃないかなと思っています。

今、見ている、余りにも先生にいろんなものを求め過ぎていて、先生も疲弊し

ていらっしゃる中で、地域とともに一緒に子どもたちを育てていこうという理想はとても分かるんですけども、実際にCSや学校支援本部、育成委員会など、見るとみんな同じ顔ぶれなんですね。全く同じ人がいろんなことを担っている中で、担う人たちも疲れてきてしまっている。次の世代を育てていきたいと皆さん思っているから、そうなるので、そうなる、保育園時代とか、幼稚園時代とか、そこら辺から、そこに預けていけば子どもたちは大丈夫ということではなく、親も共に育っていく。そういう中から一緒にやってみようということがとても大切じゃないかなと。次の世代を育てていくための大人を育てていくというところが必要じゃないかなと思っております。

○会長 ありがとうございます。コミュニティ・スクールの、特に地域学校協働というときの地域の在り方ですね。多分、23区のような大きいところでは、地域が壊れてしまって、壊れてしまったという言い方はちょっとおかしいかもしれませんが、学区も自由化されているところがあり、さらに私学へ進学することが多いと、従来のPTAのつながりがなくなってしまっているところがあります。

しかも、町内会ですとか、消防団ですとか、そうしたものが消えていく中で、地域って一体何だと言われると、よく分かりませんとしか言いようがないようなことになってしまっているのではないかと。では、子どもをどう育てるかというときに、地域が主役になろうとするわけですけども、どういう形で学校と協働をとりながら子どもを育てるのか。そのときの担い手づくりみたいなものを考えなければいけないのではないかとのお話だと思っておりますけれども、いかがでしょうか。ほかの委員の方々は。

○委員 今、委員の言ったことはまさに同感でして、私の学校でも、先日、PTAの役員を決める選考委員会があったんですけども、結果的にPTA会長以下、ほぼほぼみんな抽選、くじ引きで決めなきゃならない。その後の地域の活動を見てみると、青少年委員のなり手がなかなかいない。民生委員に欠員がいる。町会を見ると、町会長のなり手がいない。今、まさに会長がおっしゃったように、地域コミュニティが崩壊とまでは言いませんけれども、活性化はしていないという状況になっています。

そういう中で、やはりつながりを作っていくというキーワードはとても大事なんでしょうかと思っております。学校というと、そこに通っている子どもだけじゃなく

て、保護者も関わっている、おじいちゃん、おばあちゃんも関わっている。卒業生として地域でずっと頑張っていらっしゃる方もいる。そういうところから、副会長がおっしゃったように学校というものを再定義して、地域のつながり、杉並区のとつながりを作っていくようなプラットフォームにしていくという視点はすごく大事なんだろうなと思っています。以上です。

○会長 ありがとうございます。地域と言いだめるとなかなか難しいですけども。ほかにいかがでしょうか。実際に地域で生活をされているのだらうと思いますので、そのお立場からでも結構です。

○委員 会長、ありがとうございます。私も娘たちが2人、小中の学校でお世話になっている立場から言わせていただきます。こうやって資料を見せていただくと、真ん中にワクワク感がきていて、学びは楽しいという概念を本当に先生方も求められているというのがすごく伝わってきたんですけども、現実問題、うちの子は受験生なんですけれども、偏差値と成績と内申と、日々、本当に壮絶な思いを抱えて、ワクワク感のみじんもないような状況で過ごしております。

そういった中で、実際に学校の概念を変えていくというふうにしていくと、委員が先ほどおっしゃっていましたが地域のことも含めてなんですけど、やはりPTAもそうだと思うんですけども、何かちょっと強制的な部分がどうしてもあって。そういった中で、やっぱり楽しさというのはものすごく大事な、ワクワク感がものすごく大事なということ強く感じています。

あとは、排除しないという考え方、孤立させないということが大事となっていく中で、小さい子どもたちにもそうなんですけれども、10代、20代、30代、大人、ご高齢の方も、全世代の皆さんにとって寄り添いという部分が非常に大切なのかなと。コミュニケーション、つながりを続けていく中で、人と人が寄り添い合って理解していくという部分がすごく大事なんじゃないかなと。すみません、ちょっと抽象的な言い方になってしまうんですけども、感じました。以上です。

○会長 どうもありがとうございます。私も昨年までは受験生の父でしたから、よく分かります。「お父さん、いいことを言っているけれども、現実を見てよ」とよく言われます。現実はそうじゃないと。ただ、ここはやっぱり教育の変われなさとか、私たちやいろいろな方々がおっしゃっても、「じゃ、うちの子をどうしてくれるんだ」とすぐ言われてしまうわけです。そこを何とかしなければいけないと

思います。

ただ、実際に偏差値で今の受験体制が動いているかという点、本当はそうではなくなってきたと思うのです。私たちがいる大学が一番悪いのでしょうけれども。しかも、今、大学入学者の約6割がAOで入っているのです。ですから、いわゆるペーパーテストの点数で入っているのは4割ぐらいしかいないのですけれども、そうしたものとAO入試の在り方がリンクしないのですね。ですから、私たちの大学みたいところが、偏差値で輪切りにして上のほうをとっていくという方式がずっと残り続けてしまって、みんなそこへ向けてということが起こっている。ですから、本来はいろんな地域活動をしたり、社会活動をしたりした子たちがAO入試でほかのところに入っていったのです。そのあたりがリンクしなくなっているのが入試制度上問題かと思うのです。

例えばついこの間、こんなことを聞きました。日本のインターナショナルスクールに通っている子たちが、ボランティア先を探しているのだと。日本のあちこちにあって彼らをボランティアとして受け入れてくれる団体や組織は、ほとんどが国際NPOとか、NGOなのです。アフリカの貧困支援とか、いろんなことをやっているところはいっぱいある。だけれども、子どもたちが探しているのは何かといたら、町内会活動とか、地域のお年寄りの見守り活動とか、そういうのを探しているというのです。

「何で？」と聞いたら、実はアメリカのアイビーリーグとか、イギリスのオックスブリッジなどのいわゆる超有名大学は、そんな国際何とかNGOなんて、誰もがみんないっぱいやっているのです。そういう経験しか持たない人材は要らないと言っているのだというのです。むしろ地域コミュニティで自分が一体何をやってきたのか、面接で言いなさいと言われていたのだと。なので、インターナショナルスクールの子たちは、そういうところに進学を考えている子たちは、日本でそういう機会がほとんどないので探し回っているというのです。

なので、世界的な潮流としてもそのような動きがあって、コミュニティにどう関わってきたのかといったことがその学生の将来の力とも関わっているのだという見方をされ始めているのではないかと思うのです。ただ、何かまだ日本は、みんな一緒に集めておいて、同じようなテストをやって、枠に入っていればとりますよという、工業社会のやり方そのままなのかなという感じがして、中にあるものとしては

ちょっと忸怩たる思いがあるのですけれども、やはり変えていかなければいけないのだらうなと思います。

ただ、ここはすぐには変わらないので、委員の娘さんのように、そんなことを言っただけという話になると思うのですが、やはりそういう動きの中で、10年後を見据えながら、私たちがどういう社会を作ろうとしているのかといったことも関わることだらうと思います。それは経済の在り方もありますが、もう少し言えば、私たちはどういう人間関係を作ろうとしているのかといったこととも関わることではないかと思えます。ほかの委員の方々、いかがでしょうか。

○委員 先ほどたくさんのお話を頂きまして、すごく勉強になりました。ありがとうございました。

私も中学生の保護者をしておりますが、PTAのP協の会長をさせていただいていまして、本当にくじ運が悪かったなみたいな感じの思いでこの役を引き受けています。仕事もあるのに時間を取られて、とても大変だなという中、PTAの活動の中でやっていてよかったと思われる方も多分いらっしゃると思えますけれども、大勢の方がきっと「やりたくないな」ですとか、「時間を取られて大変だな」という思いでPTAとして関わっている方が多くて、心から子どもたちのためにと思っただけで積極的に関わられている方は少ないと思えます。

なぜかというところ、皆さん、家事ですとか、育児ですとか、仕事ですとか、いろいろなことを抱えていて休息がない中で、1つPTAの仕事が入ると、また時間が取られてしまう。子どもとのコミュニケーションが取れない中で、私たちから強く「やってください」とは言えません。大人自身の話を聞かせていただく中で、保護者がワクワクしていることが本当になく世の中になっているなと思っています。子どもがそういう親の姿を見て、こういう大人にしかねないのであれば、PTAとかボランティアをすると結構大変だなとか、親が帰ってくるといつも愚痴ばかり言っているよなとか、「こういう役をしているから、私大変なのよ」ともしお母さんが言っているのであれば、絶対にPTAとかはやりたくないなという気持ちに子どももなると思えます。

何か学校でできることとありますが、私もたまたまCSがある学校なので、私もCSに参加させていただいていますが、本当に同じ方が何でもされているらしくて、年代が上の方がとても多くて、考え方がちょっと違うなと聞いたこともありま

す。こういう場ではこういう話しかできないと思い知らされたりしまして、保護者の声が届いているようで結構届いていないなと保護者として参加していてすごく思っています。

やっぱり区役所ですとか、区の中のあるべき形の段取り、そういうものがあつた中でしか作ってはいけないのかなと思っている方が多くて、例えば自分たちとか、保護者ですごくやる気のある人たち、もっといろいろやりたかったなというのがあると思いますが、PTAとか、CSとかもあります、区からの依頼みたいなものでしか形を作ってはいけないのかなと。親自身も型にはめられているといいますか、学校はそういうためにしか使ってはいけないみたいな。例えば民間で親も学べるような場所を作っていただけるのであれば、偉い先生のすごい話とかでなくていいと思います。

例えばパソコンですとか、ITですとか、親も結構やってみたいなということ、保護者の中でそういうことができますよ、教えられますよということが、放課後学級みたいな感じで親も受けられたら、ボランティア的に勉強ができて、親もまたそれが仕事につながったり、夢につながったり、そういう使い方を、例えば学校のほうからも自由に使っていていいですよとか、場所が欲しいと言われていた方が結構たくさんいらっしゃると思います。クリエイターの方など。結構場所にお金がかかったり、規定や規約があつて使えない方が多いので、まず保護者がワクワクできるような時間が少しでも持てるような、仕事に持っていけるような、資格をその場で得られたりですとか、高い金額を払わないといけませんけれども、保護者間だからこそできる学び、それを見た子どもたちが一緒に入ってきて、「僕もそういうのを学びたかったんだ」みたいなことができるようなシステムじゃないですけれども、勝手にやっていていいですよと言われてたら、きっとやる方がいらっしゃると思います。どこかで法律とか、杉並区という縛りの中で動かないといけなくなると、どのようにそういうものを作っていけばいいのか、よく私たちにも分かっていないです。

まず、保護者がワクワクして、自分たちが学んでいる姿ですとか、私たちもまだまだ先の人生が長いのであれば、そういう学んでいる姿を子どもに見せることによって、もっともっと自分たちも学んでいきたいと思えるような子どもになっていくのかなと思います。私は保護者の観点からすると、保護者自身にワクワクしてもら

えるような、その場所が学校にあれば、その人たちがまたCSなり、いろんなところに気楽に、気軽に携わって行って、PTA活動にも積極的にそちらの人材から行ってもらえるようになるのではないかなと思います。そのようなことを作るのに、もう少しハードルが低ければいいのかなと思いました。

○会長 どうもありがとうございます。学校の多機能化というか、学校の概念を変えましょうということとも関わると思うのです。もう少し言うと、もともと学校はそういうふうに使われていましたよね。夜、教室なども。私が子どもの頃は、これは先生方の勤務条件もありますけれども、先生の宿直があったのです。大体、若い男の先生が女の先生の方までやらされて、若い新任の先生が来ると宿直を多く任されるので、子どもたちは、今日は自分の先生が宿直だと分かると、みんな遊びに行ってしまうたり、夜、お父さんが一升瓶を持ってやってきては自分の子どもの悩みを打ち明けて、飲みながら議論するとか、そういう場が学校でもあったのですね。もっと言えば、帰ってから、家にランドセルを放り投げて、遊びに行く場所が学校であったのです。

ただ、今、交通上危ないとか、いろんな事情の中で、あと管理責任が問われる中で、学校がだんだん入りにくくなった。学校のカリキュラムの実践が終わったら来ちゃいけない場所になってしまっているということはあると思うのです。そこを管理運用上の組み換えによって、もう少し自由に使える場所にしたり、例えば放課後、校庭でプレーパークをやったらどうかという話も少し出たと思うのですけれども、そのような形で学校が地域のいろんな学びの拠点になっていくといったことがあってもいいのかもしれない。そういう形でどんどんハードルが下がっていく。逆に言えば、そこで新しい人間関係ができて行って、地域の人々の結びつきもそこで再生されていく。さきほど副会長がおっしゃったような形で、学校が地域の人間関係を作るプラットフォームになっていくこともあり得るのではないかと思うのです。ありがとうございます。

あと、コミュニティ・スクールのことで私が少し関わっている愛知県豊田市のある中学校・小学校の一貫校があるのですが、そこはPTAをなくしてしまったのです。それから、運営協議会を置いていないのです。地域ルームというのが学校にあって、そこに地域の町内会の方やいろんな方が遊びに来てはお茶を飲んでいるのですけれども、そこに先生方か何が投げかけると、地域にザーッと広げてもらって、

地域の方々が、「これなら俺ができるよ」と手を挙げてくれて、ボランティアに来てくれるという関係ができ上がっています。例えば、私が呼ばれて行って講演をするときも、PTAがないので、PTA主催ではないのです。地域の地域ルームの人たちが、今度、牧野が来るよというのを広げてくださると、おじいちゃんからおばあちゃんから、まだ子どもが小さいお母さんたちがみんな聞きに来てくれて、学校の体育館がそういう人たちでいっぱいになるという学校があるのです。そういう作り方もあるのです。

そうすると、PTAがないので、PTA役員もやらなくていいのです。そのかわり、そういう形で地域が関わってくると、何が起きているかという、今まではブラスバンドの音がうるさいとか、野球部のボールが転がってきて危ないとか、すれ違っても挨拶もしやしないとかいって、クレームばかり入っていたのが、最近では、ブラスバンドの子、上手になったねとか、球が転がっていたから拾っておいたよとか、挨拶をしなければ、こっちから声をかけたらだんだん挨拶できるようになってきたねとか、地域の住民の言葉がそのようなことになって、クレームがなくなったとおっしゃるのです。そのような作り方も学校の仕組みとしてあるのかなと思います。

ですから、PTAを作らなければいけないと思込んでいると、そうはならないのですが、PTAがなくても、ほかの組織で動くのではないかと考えていくと、その組織の声のかけ方みたいなことが気になってくるので、そのあたりで違う関係を作れるということもあるのかもしれない。今日の大きな議題になりましたけれども、学びとか、教育とか、学校とか、そうしたものについて従来私たちが持っている観念を変えつつ、次の新しい仕組みにつなげていけるような議論になっていくかと思えます。

あと30分ぐらいしか時間がありませんが、ほかの委員の方々、いかがでしょうか。

○委員 立場上、学校教育分野での取組ということでしかお話ができないのですが、子どもたちの学びを学校教育が今後どのように支えていくのかを考えていく必要があるなど思っております。先ほど配られた資料22の別紙1-2の、子どもたちの「もし、あなたが校長先生だったら、どんな学校を作りたいですか」というのがすごくおもしろいなと思ったのは、校長に聞いても多分同じような答えが出てくる

だろうなと思っていて、学校も子どもたちも同じことを考えているだろうなと思います。

特にこの一番上の「みんなにとっていい学校」、そういう学校を作らなければいけないのは当たり前のことで、理念としては当然のことなんですけれども、その次に「楽しくて、勉強できる学校」、これは本当に重要なことだなと思います。今年の前半、遅れた学習を取り戻すことが第一義になった時期がありまして、それでもできるようになる楽しさとか、分かるようになる楽しさはあると思うんですけれども、学校での学びはそれだけではないことが今年よく分かったということがあります。今年のような状況で、オンラインで学習した大学だったり、高校だったり、塾だったりもいっぱいあったと思うんですけれども、オンラインではできない学習、できない学び、そういう活動が学校ではあるだろうなと考えました。

会長のお話の中で、仲間と一緒に発見し、創造するうれしさというお話がありましたけれども、まさに集団でコミュニケーションをとりながら、体験的に学ぶ楽しさ、これが教科にとどまらない学校における学びのすばらしい部分だろうなと思っています。それが実現できる環境を杉並区としてソフトウェア、ハードウェアの両面から整えることがこのビジョンの中に求められるだろうなと思っています。

その中で重要なのが、子どもの育成だったり、対応を担うのが教師だけではないということ。つまり、学校の先生以外のスタッフ、あるいは地域の支援、今話に出ていましたけれども、そういったものを得て、教師の役割とそうでないものの役割を明確にしていくことが必要なのかなと。教師には教師にしかできない教育があるだろうなと思うんですね。子どもを学校に預ければという発想とか、何でも先生にやってもらおうという発想、そういう社会や保護者の意識を変えていくこともビジョンの重要な役割だなと思います。それを実現するために地域の支援が非常に大事なんですけれども、それを今後どのように広げて持続していくのかが大きな課題だなと今お話を聞いていて思いました。ありがとうございます。

○会長 ありがとうございます。では、いかがですか。

○委員 いろいろないいお話を聞かせていただいて、大変ありがとうございます。

子どもたちの学習を考える中で、地域のウェートが徐々に高くなっていく反面、地域のつながりがだんだん希薄になっていることも実感しています。私の地域で

は、住民同士の関わりは比較的保たれていますが、それでも、地域の方たちが容易に学校の中に参画できるかということ、なかなかハードルが高い面もあって、特に地域の方たちの目から見ると、学校ということだけで足が一步遠のいてしまうということもあります。

ただ、その希薄になってしまった人間関係はどこかでどうにか修復していかないと、区としても成り立たない状況を迎えざるを得ないと思うんです。その中で、子どもたちのために一緒にやろうよという合い言葉を持てることは非常に大きいことかなと思います。誰が得することも損することもなく、みんな公平に、みんな協力し合って、まちと子どもたちと一緒に育てる。こういった気持ちを、今回の教育ビジョンの中から強く地域の一般の方たちに向けてもPRしていただければありがたいなと思っています。大人にとっても、子どもにとっても、学校がワクワクできる宝箱みたいな存在であってほしいなと思いました。

片や学校運営協議会ですとか、学校支援本部が、これまで盛んに活動されている学校がたくさんあります。最初はどこからスタートしたらいいのか、悩んで、悩んで、皆さん協力し合って、話し合った中から今の形ができているのだと思います。けれども、先ほどお話がありましたように、これから学校の再定義を行っていかねばいけない中で、地域の立場にしても、支えるということから協働に変わっていくよということを、より具体的に地域の皆さんに伝わるような形で発信していただきたいなと思っています。

それから、杉並区内でも地域ごとに、東と西では大分カラーが違い、地域の応援の仕方も違ってくると思うんですけれども、子どもたちにとってはその濃淡は決してあってはいけないことだと思います。提案として1つは、区として人材バンク的なものを設置していただいて、こういう協力をしてくださるですとか、こういうことに長けている方たちがいるよということを区である程度持つておいていただいて、例えば学校運営協議会、支援本部がこういうことをしたいのだけれども、相談に乗ってもらえないかというような窓口があったらいいかなと思っています。

もう1つは、できれば学習支援のレベルの担保といった意味合いで、全区ですとかなり地域のカラーも違うし、まとめることが難しい面もありますので、学校の分区単位ぐらいのくくりで、学校運営協議会同士が対話するとか、支援本部さん同士が連絡できるような連絡会的なものを設置しても良いのではないかと感じました。

○会長 ありがとうございます。お二人から随分具体的な方向性といえますか、プランのようなものが出されましたけれども、ほかにいかがでしょうか。

○委員 先ほどの受験の話聞いて、本当に胸が痛くなりました。でも、ビジョンというのは理想像なので、しかも、ここに「新」がついているから、さらに新しいビジョンをみんなで語る時に、夢を語るのはとても大きなことだと思うので、ここを出している方向性は間違いなくいい方向性だと私は実感しています。ただ、ビジョンのもう1つの意味は、「まぼろし」という意味もあるので、理想像がまぼろしにならないためにはどうすればいいかと考えたら、やっぱり具体的な実践に落とし込まれていかないとダメだと思うんですね。

そのときに、立場はそれぞれあるので、それぞれの立場でどうしたらその理想に向けて具体的な一歩が踏み出せるかというガイドライン、道筋はやっぱりつけていく必要があるのかなと感じました。例えば、ドキドキすることが学びで一番大事だとしたら、教職員、学校の先生方はよりよい授業を作るための授業実践、保育実践が最も重要だと思いますし、子どもは学びに向かって意欲的に取り組みながら、子どもなりの責任を果たしていくということも突きつけていく必要があると思うし、地域の大人は子どもの見方をみんなで緩やかに見ていくような風土をまず作っていきましょうということが同時多発的にいろんなところで起きると、少し理想像が具現化していくのかなと感じました。

本当はカリキュラムそのものも、杉並区は新しいことを生むとか、すごいことをやっちゃうとか、評価の仕方を変えるところができたらいと思うし、私も「令和の日本型学校教育」を見てちょっとびっくりしちゃったんですけども、先ほど会長がおっしゃったように、PDCAサイクルではよくなって、違うサイクルで杉並はやっていますよということが打ち出せたり、細かい教科学習では学べない価値観をたくさん学ばせるためには恐らく総合的に学ぶことが大事だと思うので、総合的に学ぶという実践をどう確保していくとか、何か新たな、みんながびっくりするようなことが杉並からできたらすばらしいなと思いました。

ただ、子どものこの発言を見ると、やっぱり杉並区って、子どもがみんなこの地区を好きなんだなというのがあふれていて、文化の薫りもするし、自然も豊かだし、ローカルとしての魅力がすごくあるから、このローカルの良さ。多分、世の中はローカルに落ち着いていくと思うんですけども、そこは強く打ち出して大丈夫

なんじゃないかなと確信しました。

私がキーワードとして入れたかったことだけ最後に言わせていただくと、「多様性」というのももちろんこのBの中にたくさん入っていて、あと、「相互依存」。お互いに依存し合っているんだよというのも入れたいなど。もう1つが「美意識」とか「美的感覚」。アートの教育が大事というお話がありましたけれども、何か美しいことに向かってみんながいくと、そうそう間違えたことは起きないと思いますので、「美的な感覚」とか、「美意識」みたいなキーワードも教育の中に入れてくるとうれしいなと思いました。以上です。

○会長 ありがとうございます。では、副会長、お願いいたします。

○副会長 やっぱり難しいなと思うのは、こういうところでいいことを考えれば考えるほど、それを実現する段階になると、親と教師がより多くのことを対応しなくてはいけなくなって、委員がおっしゃったような苦しみがより増してしまうという構造がずっとありますよね。ここへきて、よかれと思ってやっていることが全然よかれになっていない。よくならない形で実現してしまう。それから、親だけじゃないですよ。この10年、20年、親も随分追い込まれてきたけれども、教師も随分追い込まれてきて、学校との関係でワクワクできない。

例えば、このコロナで休校のときに、心配だから子どもに電話1本かけたいと思った教師が、どれだけ校長とか教育委員会から押しとどめられたかというのは、杉並区はどうだったかは知りませんが、都内でたくさんあった話ですよ。学校の回線は少ないから、全員には電話をかけられませんと。あなたのクラスだけかけちゃいけません。いや、私の使い放題の携帯があるからといっても、みんなが持っているわけじゃないからそれを使ってはいけませんと。そういう形で電話1本かけられなくて、無力感を非常に深くしたという教師の話は本当によく聞きますよね。だから、こういう状況も変えなきゃいけないということとセットでないと。

つまり、何を断捨離すべきなのかということの具体的なアイデア。これは恐らくトップダウンでないと、現場は現場なりのルール of 必然性があるからこそ、ある意味守られている部分があるから、現場で工夫して子どもに関係のないことはやめてくださいと言っても、恐らくなかなかやめられない。例えばPTAは無駄だと思うけれども、PTAがあるからこそ先生方は守られている部分もあったりして、PTAをやめるという決断は恐らくできない。

そうすると、何をやめることができるのかというアイデアのセットみたいなものは、恐らくこういう審議会で答申を出すときにアイデアとして具体的に幾つか盛り込んでいかないと、この会で子どもがワクワクすることを考えると、子どもがワクワクするために親と教師がより疲弊して、結果的に子どもたちも疲弊していくという、何かそういうことが起こり得るかなど。そこはすごく危惧もしますし、ぜひ大胆な断捨離のプランも我々としては提言をしたい。事務局の先生方からは、こういうことだったらできるんじゃないかということをお聞きしたいとか、そのようなことが必要になってくるんじゃないかなという気がします。

○会長 ありがとうございます。過激な発言が出ましたけれども、確かにそう思います。何を断捨離するかということもありますけれども、例えば先ほど地域がということがあったのですが、よく読んでいただくと分かるかもしれませんが、中教審で今回のカリキュラムの議論をするときに、家庭が出てこないのです。今までは学校教育と家庭教育支援と社会教育がセットだったのに、家庭教育が入っていないのです。なぜかという、家庭が多様化し過ぎて、もう家庭に頼ることは無理だという判断が働いていたということです。これ以上家庭に負担をかけると壊れてしまうかもしれない、そういうことが1つあります。

それからもう1つは、特に東京都内は、いわゆる地域と言われているものがないのではないかという議論も出たのです。盛り込まれていませんけれども、そのときにどんな議論までいったかという、企業を使ってもいいのではないかという話まで出たのです。子どもの将来に関心があって、心配している企業があるのであれば、連携をとってやっていいのではないかというぐらいまでの議論が出たのです。企業の使い方もあると思いますが、そうなってくると、公教育とは一体何かといったことそのものを組み換えなければいけなくなっているということなのですが、逆に言うと、そこまできてしまっているということなのではないかとも思うのです。

そういう意味では、今、副会長がおっしゃったように、いいことをやろうと思うと負担がかかるころというのは、圧力点は2つしかないのです。学校と親しかないので。そこがどんどん疲弊することによって、実は子どもがどんどん疲れていってしまうという悪循環になってしまう。しかも、いいことだと思って国が政策を作る。例えば生きる力をつけましょうと言った途端に、それが評価されることにな

ってしまうと、横に広げるつもりが縦の序列になっていってしまうことになっていて、何が起きているかという、「算数ができないあなたは人格が悪いからだ」みたいな話になっていってしまったところがあるわけです。そうならないようにしなければいけないということがあるので、そこは何をやめて、何を加えるのかという議論をしておかないと、多分皆さん、あっぷあっぷだと思うのです。

今日は時間がありませんので、そろそろ締めなければいけないのですが、例えば皆さんのほうからいろいろご意見を出していただいて、それに対して教育委員会として、ここなら一遍整理できるよというお考えがもしあれば、ちょっと整理をして出していただくことも、どこかで機会があればやれないかなと思います。杉並区の教育として一体何を大事にしながら、何をもっと前に進めていこうとするのか。今までの社会の名残として持っていたものを、どう整理して、次に行こうとするのかという議論もしなければいけなくなっているのかなという印象はあります。

もう1つは、今日は議論に出ませんでしたけれども、GIGAスクール構想が出て、今、1人に1台タブレットが配置されることになっている中で、子どもの学び方をどう変えるかという議論をしなければいけないと思うのです。杉並区はそれなりにこれからやっつけていかれようとしていると思いますけれども。私が知っている幾つかの学校は、1人ずつタブレットがきました。1人ずつ勉強していくと差が出るといけないからと、教室に集めて同じように先生が指示したとおりにやいなさいと指導しているという、全くわけが分からないことになっているのです。これが平等だと思われているのです。

これからの平等というのは、先ほど申し上げたように、一人ひとりが深く突き詰めていくことを、どうお互いに交流しながら、違うものに組み換えて、みんなが違うものを作り出していけるような条件を作るかといったこと、そういう関係をつくることこそが平等だという考え方にしていかなければいけない。その意味では、個別学習をどんどん進められるように一面で保障しながら、……実は、GIGAスクールの議論で足りないのは、このことしか言っていないということなのです。が……、それをどう教え合う関係とか、交流する関係に組み換えて、みんながそういうことができるような条件をみんなの中でどう作り出すかといったことを問わなければいけない。それは、言い方を変えれば個別最適と言われるのですが、個別

最適を突き進めることと同時に、全体最適に持っていくにはどうしたらいいかという議論をしなければいけないということなのです。

その意味では、そのようなものを教育システムの中にどう組み込むのかといったことも当然これから問われてくるでしょうし、そうなれば、例えばこの2か月間、学校が休みになったときに、私は杉並の子たちはよく知りませんが、私がつき合っている子どもたちは、学校が再開されて行ったら、みんながっかりしたというのです。なぜかという、「先生の教え方ってあんな下手だったのか」と思ったと言うのです。実は2か月間、ネットでいろんな予備校の先生方の授業を受けてしまっていて、「すごくおもしろかった」と言うのです。だけれども、「学校はどんなの？」と言うと、「楽しい」と言うのです。「何が楽しいの？」という、授業ではないのです。友だちと交流できたり、一緒になって探求できることが楽しいということがあって、その意味では個別学習を進めることと、楽しいという関係の中でもっと何かが変わっていくとか、突き詰められるとかいう経験を彼らがしていくことのほうが大事なのではないかと思うのです。

○委員 それに加えて、私、最初の会で児童の権利条約のことも申し上げましたけれども、やはり子どもたちが自分の周りを自分たちで変えることができるという経験ですね。極端に言えば、校則をなくしちゃうとかね。そういうことを自分たちで作っていく。自分たちの身の回りを自分たちで変えていく経験をするによって、大人になって社会を変えていくことができるという自己有用感を育てていけるのではないかと思います。学校からの発信は、どうしても深い学びとか、そういったことにいっちゃんだけれども、学校が発信できることってそれだけじゃない。学校での生活経験が将来につながること。

それから、キーワードとして私は、そのままを載せてくださいというのではないけれども、やっぱり「共生社会」ですね。特別支援教育の理念の中で、初めて国が日本の将来において大事なんだよと言ったのが「共生社会」なんですね。それはぜひ入れていただきたい。

あと、会長のお話は、私の文脈ではキャリア発達の文脈なんです。でも、それもその言葉だけじゃ固いから、別の言葉にしたほうがいいと思いますが、必要なコンセプトだと思います。あと、ファシリテーション。権利と権利がぶつかり合うところで、どうやって折り合っていくかという、そのあたりが学校教育の中に入ってい

くといいのかなと思いました。ありがとうございました。

○会長 ありがとうございます。では、いかがですか。

○委員 キーワードの話から少しそれてしまうんですけども、委員の受験の話聞いて1つ気がついたことで、今回の教育ビジョンの最初の位置づけの話に戻ってしまうんですけども、学校といった場合に、何となく小学校、中学校を前提にしているなという気がしました。今日、この場に高校の先生とか、高校の関係者はいないんだなということに気がつきました。

この資料22のアンケートを見ても、小学生、中学生とあるんですけども、高校生、大学生は選択肢さえないというか、子どもの範囲に入っていないのかなと。杉並区の学校教育を考えたときに、小中が中心になるのかもしれないですけども、結局、高校が変わらないと、そのための受験勉強は幾ら小中を変えても変わらなかったりしてしまうので、この教育ビジョンに高校をどう絡めていくか。もしかしたら都あるいは地域に協力してもらうのかもしれないんですけども、その前提だけ何か考えられるといいのかなと。ちょっと忘れないうちにコメントさせていただきました。

○会長 ありがとうございます。区なので、区立小・中学校がベースになっているという考え方でできていると思いますので、当然そこが重点化されているのだと思いますが、今おっしゃったように、高校や大学も見据えて、さらに大人のことも含めて、少し今日は大きく議論ができたのではないかと思います。その中で、従来の私たちが持っている観念や概念を変えつつ、今後の来るべき社会の在り方に組み換えていくのですね。

そのときに、例えば具体的には副会長がおっしゃったみたいに、いわゆる断捨離というか、もうこれ以上続けなくてもいいのではないかといったものはきちんと整理しながら、新しいものをどう組み込んでいくのか。その中で、教員の先生方、または保護者の方々が疲れてしまわないような在り方、ちょっと勘弁してほしいと言わなくても済むような在り方を考えていかなければいけないだろうということと、さらに、子どもたちや若者たちを支えていく側としての大人たちの在り方をどう考えるのか、こういうことが議論されたのだと思います。

既にいわゆる地域というものが十分に意識できないような状態になっている中で、そこでどういうつながり方をもう一度考えていくのかといったことも重要で

す。そのときに、前回から少し出ていますが、むしろ学校という場が地域住民の交流の場になっていくことで、新しいコミュニティを作り上げていく基盤になることは可能ではないかというお話も出ているのだと思います。そして、そこで、子どもたちの生きることを基本に置きながら、彼らの権利ですとか、または遊びですとか、自己探求することですとか、ワクワクする生活をどう保障するのか。と同時に、それを通して大人がどうワクワクするのかといったことが問われているのだというお話になったのではないかと思います。

今日のところはもうそろそろ時間が来てしまいましたので、ここまでにさせていただきながら、あと事務局の方々、大変かもしれませんが、今日の議論をまとめていただいて、また次に向けて議論を深めていきたいと思っておりますので、またどうぞよろしくお願いいたします。

骨子の作成にこれから入っていかねばいけないのですが、またぜひよろしくお願いいたします。

最後になりますけれども、事務局から事務連絡をお願いしたいと思います。

○庶務課長 ちょっと事務連絡の前に、委員からお話がありましたように、フレームというところで言うと、今日は小・中学生、また大人のアンケートということで、第1回目のときにできるだけ多くの声を聞いていこうというご意見、また、我々もそう考えています。例えば区内には大学が数校ありますから、そういった連携、また、都立校連携というところで組んでいますので、そういったセグメントにも聞いていきたいという準備はしつつあるんですけども、今コロナで先方さんもなかなか時間を作れないところで、話しかけをしているところがあります。ですので、また機会が許せば、すぐにでもそういった声も、数はとれないかもしれませんが、様々な角度の声を拾っていききたい、そして、作り上げていききたいと思っ

ているということをご理解いただければと思います。

それでは、次回の日程でございますけれども、1月25日（月曜日）18時から、区役所中棟の5階、この下になりますが、第3・第4委員会室で開催ということになります。会場が変わりますので、ご注意ください。

こちらからは以上です。

○会長 どうもありがとうございました。それでは、以上で今日の審議会の議事を全て終了いたしました。円滑な議事進行にご協力いただきまして、どうもありがと

うございます。私はこれから帰って、下宿でくすぶっている留学生とともにオンラインの飲み会をやりたいと思います。日本人は帰省してしまっていますが、留学生は帰れなくてくすぶっていて、ちょっとメンタルが大変なことになっているのがいますので。どうもすみません。雑談ですけども。

では、本日の審議会をこれで閉じたいと思います。どうもありがとうございました。

— 了 —